

群 教 七	G05 - 04
	平14.205集

自らの学習状況に気付ける 評価活動の在り方の探究

— イメージをもって音楽表現する学習の場において —

長期研修員 清田 和泉

I 主題設定の理由

本研究は、「自らの学習状況に気付ける評価活動」に着目して実施された授業の事例を収集し、分析・考察によってその在り方を探究し、提言を行うことで、音楽科の授業改善を目指すものである。事例の収集は、中学校音楽科の「イメージをもって音楽表現する学習の場」において行う。

今年度より、評価に関しては、従来の「集団に準拠した評価」から、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を見る評価（いわゆる絶対評価）を一層重視し、観点別学習状況の評価を基本として、児童生徒の学習の到達度を適切に評価していく「目標に準拠した評価」へと変わった。従来の指導において、評価というと、「学期末や学年末に、教師が生徒に対して5段階による評定をつけること」という認識が強く、集団に準拠した評価に偏りがちであった。また、授業での評価活動についても、数人からクラス全員までの複数による音楽活動では、「もっとここをこうしてみたら」とか「いい声が出せているよ」など、全体に目を向けた評価が多くなりがちで、一人一人の到達度の確認や、感じ方や考え方のよさの認めが十分ではなかった。そのため、積極的に取り組む生徒がいる一方で、なかなか自信をもてずに取組が消極的になってしまう生徒もいた。

そこで、本研究では、「自らの学習状況に気付ける評価活動」に着目した。それを具体化し授業に位置付けることにより、育成したい資質や能力がより確実に身に付いたり、一人一人の感じ方や考え方のよさを認めたりすることができる。自分に資質や能力が着実に身に付いていく実感を得たり、自分のよさが自覚できたりしてくることにより、生徒は自信をもって音楽活

動に取り組むようになると思った。

また、今回、「イメージをもって音楽表現する学習」を研究の場に設定したのは、以下のような理由からである。

「イメージをもって音楽表現する学習」とは、音楽のもつ豊かさや美しさを自分なりの感じ方で味わい、その結果、喚起されたイメージを、自らの表現の工夫により音を通して実現する学習である。イメージをもって音楽表現することにより、音楽に対する感性が育ち、さらなる音楽活動への原動力が生まれ、自分にとっての音楽の意味を見つけ出ししていくことができる。そのことは、音楽科の目標である「生涯にわたって音楽に親しむこと」につながっていくと考えられる。

しかし、これまでの自己の実践では、ある程度まとまった音楽表現ができるようになることを優先しすぎて、教師の考えによる音楽表現の仕方を押しつけてしまうことが多かった。その結果、生徒が音楽に対する生徒なりの感じ方をもっていただけとしても、それを音を通して自由に実現する場面をあまり設定してこられなかった。感性を生かして自分なりの音楽表現をするためには、イメージをもって音楽表現する学習が必要だと考えたのである。

以上の考えに基づき、本主題を設定した。

II 研究のねらい

「イメージをもって音楽表現する生徒」の育成に向けた授業実践の事実を分析・考察することを通して、「自らの学習状況に気付ける評価活動の在り方」を探り、よりよい評価活動の在り方についての提言を行う。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

本研究では、「イメージをもって音楽表現する生徒」の育成に向けた授業実践の事実の分析・考察を通して、自らの学習状況に気付ける評価活動の在り方を探究していく。

(1) 「自らの学習状況に気付ける評価活動の在り方を探究する」ことについて

本研究で探究する「自らの学習状況に気付ける評価活動」は、生徒が、目標と照らし合わせた自分の今の学習状況をとらえ、自らの力で目標達成を図っていきけるような評価活動のことである。教師は、生徒が目標の実現に向けてどのように変容しているかを見取ることができ、生徒のつまずきに対する支援の方法を考える材料とすることができる。

音楽科の授業改善を図るには、実際の授業で、どのように「自らの学習状況に気付ける評価活動」を位置付けると効果的なのだろうか。生徒が自らの学習状況に気付いていくためには、教師の評価をその都度伝えていくことに加えて、生徒自身の「自己評価」「相互評価」が重要であると考えられるが、生徒たちによる評価を、より信頼度の高いものにする必要があるだろう。また、授業の流れを止めたり、評価のための授業になったりせずに、指導と一体となった評価、生徒から見た学習と一体となった評価を行う必要があるだろう。さらに、目標の達成が図れていない生徒がいれば、その生徒に応じた支援を行う必要もあるだろう。

「自らの学習状況に気付ける評価活動」をより効果的に授業に位置付け、授業改善を図るためにはどうすればよいのかを、数人の授業者による実践の事実を分析・考察することによって探り、よりよい評価活動の在り方についての提言を行いたい。

(2) 「イメージをもって音楽表現する生徒」について

現代のような変化の激しい時代、明るく潤いのある家庭や社会を形成していくために、生涯にわたって音楽に親しむことがますます重要である。そのために、中学校では、音楽に対する感性を豊かにし、自分にとっての音楽の意味を見つけ出し、いけるように支援したい。

「イメージをもって音楽表現する」とは、音

楽のもつ豊かさや美しさを自分なりの感じ方で味わい、その結果、喚起されたイメージを、自らの表現の工夫により音を通して実現することである。それは、教師の考えによる音楽表現をすることではなく、生徒自身が自分の感性を生かして音楽表現することである。そのような活動を通して音楽に対する感性を豊かにしていくことは、生涯にわたって音楽に親しもうとする気持ちをもつことにつながっていくと考える。

音楽のもつ豊かさや美しさを自分なりの感じ方で味わうには、生徒自身が自分の感じ方や考え方に自信をもてるように支援することが大切である。また、喚起されたイメージを自らの表現の工夫により音を通して実現するには、一人一人がもったイメージが他から十分に尊重されたり、それぞれの生徒が他とは違う自分の感性を自覚できたりするように支援することが大切である。

2 研究の方法

上記の内容を探り、提言していくために、以下のような方法で実践し、分析・考察する。

(1) 授業実践そのものにかかわる部分

- ① 「イメージをもって音楽表現する生徒の育成」に向けた、評価活動を行うべき“学習過程でのポイントとなる場面”はいつなのか、生徒の何を見取るのかを想定する。
- ② “学習過程でのポイントとなる場面”での評価活動を具体的に想定する。
- ③ 評価内容・評価規準・評価方法を盛り込んだ、題材の指導計画を作る。
- ④ ③に基づき、学習活動における具体的評価規準と規準達成の状況例を作る。
- ⑤ 授業実践は、県内の三中学校で、四人の授業者により行う。授業の事実、観察者による授業の観察記録・VTR録画内容・生徒の学習カードへの記述内容から得る。

(2) 授業実践の分析・考察にかかわる部分

授業実践の事実から、みえてくることは何なのか、どんなことがいえるのかを分析・考察していくが、主な着目点としては、以下のようなことがあげられる。

- ① 生徒が目標達成に向かうために必要なことは何か。

- ② 実際の評価活動はどのように行われたのか。
- ③ 生徒の「自らの学習状況への気付き」の様子はどうか。
- ④ 題材の目標を達成するために、教師は、生徒の「自らの学習状況への気付き」を、次の学習活動の組立ての調整や指導方法の改善にどのように生かしたのか。
- ⑤ 教師はどのような配慮点をもって授業に臨み、目標の達成が図れていない生徒を見取り、それぞれに応じた支援を行ったのか。
- ⑥ 学習カード等の補助プリントを、どのように作成し、活用したのか。
- (3) 提言にかかわる部分
分析・考察によって得られたことをまとめ、「イメージをもって音楽表現する学習」における「自らの学習状況に気付ける評価活動」の在り方について、提言を行う。

IV 研究の推進

1 研究推進計画

本研究を推進するために、県内にある三つの中学校で同一題材を用い、授業実践の事例を収集する。

第1次実践では、「自らの学習状況に気付ける評価活動」を位置付けた授業の事例を収集し、その分析・考察からいえることを、主な着目点に沿ってまとめる。第2次実践では、第1次実践で得られた考えを基に練り直した授業の実践事例を収集し、その分析・考察からいえることを、主な着目点に沿ってさらにまとめる。第3

次実践は、まとめた考えに基づく授業が、一般的に実施できるかどうかを確認するために行う。研究推進計画は表1のようである。

2 本研究で取り上げた題材について

本研究における授業実践で、取り上げた題材については以下のようである。

(詳細は、資料編1.3.4.5参照)

- (1) 題材名 楽器の特徴を生かし、イメージをもって表現しよう
教材名 「こきりこ節」
富山県民謡

(2) 目標及び題材の評価規準

目標及び題材の評価規準は、表2の通りであり、第1次実践から第3次実践まで同じものとした。ただし、学習活動における具体的評価規準については、実践を重ねるごとに改良を加えていった。

表2 目標及び題材の評価規準

目標	曲の雰囲気から自分の表現したいイメージをもち、そのイメージの実現を目指して、楽器の特徴を生かして表現する。		
題材	ア音楽への 関心・意欲・ 態度	イ音楽的な感受や 表現の工夫	ウ表現の技能
評価 規 準	・ 感じ取った曲の雰囲気から、自分の表現したいイメージをもち、箏で表現することに意欲的である。	・ 自分の表現したい音色等のイメージをもち、それらを表現するための奏法を工夫している。 ・ 箏の奏法の特徴や効果を生かした表現の工夫をしている。	・ 自分のもった曲のイメージに合う表現をするための技能を身に付けている。

(3) 学習の流れ

学習の流れの概要は、表3の通りである。

表1 研究推進計画

階	実践校等	作業の目標	作業内容	作業方法
第1次実践	A 中学校 3年生	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習状況に気付ける評価活動を位置付けた指導案の作成を行う。 作成した指導案に基づいて行われた実際の授業を分析・考察する。 分析・考察からいえることを、主な着目点に沿ってまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実践校の実態に合わせて、研究の方法(1)①～④にあたるもの(学習指導案)を作成する。 授業実践後に、研究の方法(2)①～④について、可能な範囲で分析・考察を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業中における観察 授業者との話し合い 学習カードの分析 VTRの分析
	期間 平成14年 7月			
第2次実践	B 中学校 3年生	<ul style="list-style-type: none"> 第1次実践の分析・考察から得られた考えを基に、指導案の改善を行う。 改善した指導案に基づいて行われた実際の授業を分析・考察する。 分析・考察からいえることを、主な着目点に沿ってさらにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実践校の実態に合わせて、研究の方法(1)①～④にあたるもの(学習指導案)を作成する。 授業実践後に、研究の方法(2)①～④について、可能な範囲で分析・考察を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業中における観察 学習カードの分析 VTRの分析
	期間 平成14年 11月			
第3次実践	C 中学校	<ul style="list-style-type: none"> まとめた考えに基づき、学習指導案の作成を行う。 まとめた考えによる授業が、一般的に実施できるかどうかを、実際の授業の分析・考察から確認する。 まとめた考えを整理し、研究の成果として提言していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 実践校の実態に合わせて、研究の方法(1)①～④にあたるもの(学習指導案)を作成する。 授業実践後に、研究の方法(2)①～④について分析・考察を行い、第1次実践から第3次実践までの分析・考察と合わせて、まとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業中における観察 授業者との話し合い 学習カードの分析 VTRの分析
	期間 平成14年 12月			

表3 学習の流れ

時	○目標 ・学習内容
第1時	○ 「こきりこ節」のメロディーを覚え、箏で表現できるようにする。 ・「こきりこ節」を知る。 ・箏で「こきりこ節」を弾けるようにする。 ・自分の技能習得の程度を把握する。 ・本時のまとめをする。
第2時	○ 表現したいイメージを実現するための工夫をする。 ・「こきりこ節」に対する自分のイメージを明確にする。 ・表現活動を行うためのグループを作る。 ・自分のもったイメージを実現するための奏法等を探る。 ・自分の技能習得の程度を把握する。 ・本時のまとめをする。
第3時	○ 自分で工夫した表現を取り入れて、「こきりこ節」を演奏する。 ・イメージの実現のために練習を行う。 ・自分の技能習得の程度を把握する。 ・[発展的な学習として]小アンサンブル活動を行う。 ・工夫した表現の交流をする。 ・本時と本題材のまとめをする。

V 授業実践の分析と考察

1 生徒が目標達成に向かうために必要なことは何か

第1次実践の見取りの結果、Cと判断される生徒は一人もおらず、生徒が目標達成に向かうことができた。これは、なぜなのか。

(評価規準詳細は表3~5参照)

第1次実践第1時の授業を分析し、生徒が目標達成に向かうために必要なことはどんなことなのかを探ってみた結果、以下のようなことが明らかになった。(詳細は資料編2参照)

(1) 身に付けさせたいことの明確化と共有化 ・教師は、その学習活動で、生徒に何を身に付けさせたいのかをはっきりと自覚して授業に臨むこと(明確化)。また、その内容を生徒にきちんと伝えること(共有化)。 ・生徒自身も、その学習活動で何を身に付けるのかを自覚して学習に臨めるようにすること。
(2) 教師による授業の流れの調整 ・教師は、生徒の学習活動の様子から生徒の目標への達成度や学習への取組具合を評価し、その状況に応じた適切な支援を行い、授業の流れの調整を図っていくこと。
(3) 生徒による評価活動の充実 ①自己評価 ・教師が生徒の学習状況をうまくつかみ、ほぼ全員ができるようになってきたことを確認し、評価活動を行うタイミングを図ること。 ・「自己評価をするための表現活動」で、自分にできる精一杯の表現を目指させること。 ②相互評価 ・生徒に相互評価の価値を認識させること。 ・生徒にも評価可能な見取りの視点を、教師がきち

んと伝えること。 (4)教師の見取りと個に応じた支援 ・生徒の活動中に巡回支援するときは、目標に即した見取りの視点をもって見回り、個に応じた適切な支援をしていくこと。 (5)技能習得の個人差に着目すること ・技能習得の個人差を見極め、その生徒なりのペースで習得できるよう支援すること。
--

これらのことをより明確にし、意図的に指導案に位置付けながら、第2次実践に取り組んだ。(資料編3.4参照)

2 「イメージをもって音楽表現する生徒の育成」を視点に、実際の評価活動はどうだったのか、そこからいえることは何か

(1) 生徒の姿が見える評価規準

第1次実践の学習活動と評価活動の概要は、表3のようである。(詳細は、資料編4参照)

表3 第1次実践における学習活動と評価活動の概要

時間	○学習内容	題材の評価規準との関連	評価方法等
1	○ 「こきりこ節」を知る。 ○ 箏で「こきりこ節」を弾けるようにする。	アの① アの① ウの①	・観察 ・観察、学習カード(自己評価・相互評価を含む)
2	○ 「こきりこ節」に対する自分のイメージを明確にする。 ○ 自分のもったイメージを実現するための表現の工夫をする。 ○ 工夫した表現の交流をする。	アの② イの① アの③ イの② ウの② アの①	・学習カード ・観察、学習カード(自己評価・相互評価を含む)

ここでは、表4のような具体的評価規準を設定し、さらに、観点別評価を進めるために表5のようにおおむね満足できる状況と判断する例と十分満足できる状況と判断する例を学習指導案中に例示しておいた。この判断例に沿って観点別評価を行った結果は、表6である。

表4 第1次実践における具体的評価規準

ア	①「こきりこ節」を表現することに関心をもっている。 ②「こきりこ節」のイメージ、音色・リズム・節回し・速度・強弱・曲想に関心をもっている。 ③表現の工夫を発想するための試行表現に、意欲的である。
イ	①「こきりこ節」に対する自分のイメージをもち、それを生み出す音色・リズム・節回し・速度・強弱・曲想の特徴を感じ取っている。 ②表現したいイメージを実現するための表現の工夫をしている。
ウ	①箏で「こきりこ節」の表現ができる。 ②表現したいイメージを実現するための技能を身に付けている。

(ア. 音楽への関心・意欲・態度 イ. 音楽的な感受や表現の工夫 ウ. 表現の技能)

表5 第1次実践における観点別評価の進め方

●おおむね満足 ◎十分満足

アの①	
● 「こきりこ節」を歌ったり、箏で弾いたり、友達の発表を聴いたりすることを一生懸命行っている	◎ 上記の点について、大きな声で表情よく歌ったり、箏で表現するときに何度も弾いてみたり、友達の発表に真剣に耳を傾けたりする様子が見られる。
アの②	
● 「こきりこ節」の視聴覚教材を鑑賞し、イメージ、音色・リズム・速度・強弱・曲想について感受・知覚した内容を学習カードに記入している。	◎ 上記の点について、十分な量かつ適切な内容での記述が見られる。
アの③	
● 箏の表現に意欲的に取り組んでいる。	◎ 箏でよりよい表現ができるよう、何度も練習したり、友達の練習をよく見て、アドバイスをしたりするなど、より主体的・意欲的に取り組んでいる。
イの①	
● 「こきりこ節」の視聴覚教材を鑑賞し、学習カードに記入した感受した内容が、次のような点に触れている。 イメージ：(自分なりの表現で書けている) 音色：地声による発声で、強い響きがある リズム：四拍子だが、きっちりと合っていない 節回し：こぶしがきいている 速度：ゆったりとしている 強弱：あまり強弱の幅はない 曲想：のんびりしたような感じ	◎ 上記の内容が、十分な量かつ適切な内容で記述されている。
イの②	
● 学習カードに自分のもった表現したいイメージを記入している。	◎ 上記の内容が、十分な量かつ適切な内容で記述されている。
ウの①	
● 「こきりこ節」の探り弾きの際、正しい爪の付け方・基本的な構え方・弾き方ができている。	◎ 上記の活動の際、基本的な奏法がきちんとできているだけでなく、よい音を出そうと心がけながら表現したり、友達の練習を見てアドバイスをしたりするなど、主体的・意欲的に取り組んでいる。
ウの②	
● 表現したいイメージを実現するため、自分からすすんで技能を身に付けている	◎ よりよい表現ができるよう、自分で納得できるよう何度も練習したり、友達に聴いてもらってアドバイスをもらったりにしている。

表6 第1次実践における見取りの結果

評価規準	3年○組			3年△組			3年□組		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
アの①	25	8	0	27	5	0	30	2	0
アの②	22	11	0	12	20	0	27	6	0
アの③	12	21	0	19	13	0	19	14	0
イの①	14	19	0	13	19	0	21	12	0
イの②	9	24	0	20	12	0	19	14	0
ウの①	8	25	0	11	21	0	9	24	0
ウの②									

(※ウの②は、この学習活動からだけでは見取れなかった。)

学習指導案中に、「観点別評価の進め方」として表5のように記載しておいたにもかかわらず、実際の評価は、学習カードの記述内容から判断したものがほとんどになってしまった。「学習カードのこの部分をこう書いていたらA」などと、量的に判断することが中心になってしまった。なぜ、そうってしまったのか。

観察による評価によって、規準を達成してい

るかどうかというBの見取りは行うことができ、Bに到達するのがむずかしいと思われる生徒への支援も行うことができた。しかし、Bのうち、どの生徒をAと判断するかが不明確であった。表5の観点別評価の判断例の書き方が、あいまいであったためである。そのため、さらに具体的な生徒の姿による「評価の進め方」を作成することが必要であると考へ、第2次実践では、表7のようにこの部分を新たに作成した。(詳細は、資料編5参照)

表7 第2次実践における「評価の進め方」

学習活動における総括的評価規準・形成的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な評価の方法 ・Aとする場合のキーワード ・Cと判断される生徒への働きかけ
アの①	<p>【教師による評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価の方法 <p>この観点については、本題材の学習過程における、すべての表現活動について、評価をしていく。練習している生徒たちの間をまわりながら、一人一人の活動状況を観察していく。</p> <p>まずは、すべての生徒が、すべての活動において、「おおむね満足」を達成できることを目指し、そのような授業を仕組んでいく。</p>

以上のことから、

・評価規準を書き表すには、できるだけ具体的に生徒の姿が見えるように書いていくこと。そのためには、教師がより明確に学習目標をつかんでおくこと。

が重要であることがわかる。

(2) 評価規準の細分化と共有化

第1次実践では、表4のように学習活動における具体の評価規準を示して授業に臨んだが、規準達成の判断例が教師から見た書き方で示されていたため、自分の力で目標達成を図るために生徒に示すには、まだ大きすぎた。生徒が、自らの学習状況に気付きながら目標達成を目指すためには、具体の評価規準を、生徒にもわかるようにさらに具体的に表しておく必要を感じた。そのため、第2次実践では、「総括的評価規準」「形成的評価規準」という新たなことばを使って、具体の評価規準をさらに細分化することにした。さまざまなレベルの評価規準の関係を表に表すと以下のようなになる。

従来のもの	内容のまとめりととの評価規準	学習指導要領レベル
	題材の評価規準	題材レベル
	学習活動における具体の評価規準	学習活動レベル

さらに細分化	学習活動における総括的評価規準	「学習活動における具体的評価規準」にあたる。それぞれの学習活動における最終目標を表す。(生徒にもわかることば)
	学習活動における形成的評価規準	それぞれの学習活動の最終目標に到達するためのマイルステップを表す。(生徒から見た書き方)

「総括的評価規準」に到達するためには、「形成的評価規準」を一つ一つクリアしていくことが必要である。「形成的評価規準」は、生徒にとっては、次にクリアすべき目標であり、教師にとっては、Bに到達するのがむずかしいと思われる生徒を見取り、支援するためのチェックポイントである。このような考え方で評価規準を細分化すると表8のようになる。

表8 第2次実践における評価規準の細分化

	ア 音楽への 関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や 表現の工夫	ウ 表現の技能
学習活動における総括的評価規準	① 友達と協力しながら表現活動に意欲的に取り組んでいる。	① 「こきりこ節」の音楽の諸要素の働きを知覚している。 ② 自分の表現したいイメージを音で表現するための奏法等の工夫をしている。 ③ 友達との表現を聴き、そのよさや工夫を聴き取っている。	① 「こきりこ節」を、箏で多少の間違いはあっても、最後まで弾くことができる。 ② 「こきりこ節」を少しでも自分なりの表現の工夫を加えながら弾くことができる。 ※技能面の総括的評価は、題材の終末で質的に行う。
学習活動における形成的評価規準	①について a 「こきりこ節」が箏で弾けるようになるという期待感をもって、途中で投げ出さずに練習に取り組める。 b 「こきりこ節」の音楽の諸要素の働きを知覚したり、表現したいイメージをもったりする活動に取り組める。 c 自分のイメージを実現するための試行表現活動に取り組める。 d イメージの実現を目指して、表現活動に取り組める。	①について a CDを聴き、「こきりこ節」の音楽の諸要素ごとの特徴を書き留めることができる。 ②について a 自分の表現したいイメージをとらえることができる。 b 自分のイメージを実現するためにはどんな音を出せばいいのかを予想する。 c さまざまな音色を出すための箏の奏法を知る。 d 自分のイメージにあった音を試行表現によりさがしていく。 ③について a 友達との表現のよさや工夫を、学習カードにメモする。	①について a 「こきりこ節」を歌える。 b 爪の付け方や構え方、弾き方がわかる。 c 楽譜の見方がわかる。 ②について a 譜面を見ながら、たどたどしくても最後まで弾ける。 b どこが弾けないのかが自分でわかり、そこを取り出して何度も練習する。 c 自分の表現したいイメージにあうように工夫を考えていく。 d 自分の表現したいイメージに近づくように、何度も練習する。 e 友達に聴いてもらって意見をもらう。 f さらに練習する。

この考え方で、第2次実践を行ったところ、生徒により明確に目標を示すことができ、生徒は自らの学習状況によりよく気付けるようになり(後述)、教師も生徒一人一人の様子がよりよくわかるようになった。見取りの結果は、表9のようであった。このことから、

表9 第2次実践における見取りの結果

	3年〇組		
	A	B	C
アの①	34	1	0
イの①	14	20	0
イの②	23	12	0
イの③	22	13	0
ウの①	32	3	0
ウの②	22	13	0

(数字は人数)

生徒が自分の力で目標を達成するためには、
・教師と生徒とが目標を共有すること。
・学習活動レベルの評価規準を細分化し、生徒にもわかるようにしておくこと。

が重要であることがわかる。

(3) 「音楽への関心・意欲・態度」の見取り
第1次実践では、表4のように「音楽への関心・意欲・態度」の具体的評価規準を三つ設定しておいた。それぞれの学習活動での取組の様子を見取っていかうとしたのである。しかし、わずかな時間の活動の様子から、観察によりそれらを見取ることには無理があった。そこで、第2次実践では、表8のように「関心・意欲・態度」の具体的評価規準を一つにして、教師が題材全体を見わたしながら生徒を見取っていきようにした。それぞれの学習活動での見取りの視点が、形成的評価規準としてより具体的な生徒の姿で示されていたことと、題材全体としては総括的評価規準で見取ってあげればよいことから、教師は余裕をもって授業に臨むことができた。また、生徒にはそれぞれの学習活動のまとめごとに自分の「一生懸命度」を自己評価させ、自らの「関心・意欲・態度」の度合いに気付いていけるようにした。このことから、

・「関心・意欲・態度」は、題材全体を見通しながら、長い目で生徒の様子を見取っていくこと。

が重要であるといえる。

(4) 「表現の技能」の見取り

前出表3に示すように、ウの②がこの学習活動からだけでは見取れなかったのはなぜか。

全員が一斉にそれぞれの課題に向かって学習しているときに、巡視をして、それぞれの生徒の活動状況を見ていくことはできる。しかし、一斉に音が鳴っている中で、一人の生徒の音だけを正確に聴き取ることはむずかしかったり、

支援が必要な生徒がいた場合に、その生徒のところにかかりきりになってしまったり、他の生徒まで目が行き届かなかったりしてしまう。すべての生徒に平等に目を向けることができないのである。「表現の技能の見取り」は、教師の観察からだけでは、確実にを行うには無理があった。では、時間に余裕のない中で、できるだけ正確に生徒の技能の習得状況を見取るにはどうすればよいのか。やはり、生徒の「自己評価」や「相互評価」により、生徒が自分自身の技能習得の状況を見取れるようにすることが必要である。そのためには、

- ・生徒が目標を把握して学習に臨むこと。
- ・生徒が自分の技能習得の状況にできるだけ正確に気付けるようにすること。
- ・教師は、目標に照らして、個に応じた支援をすること。

が重要である。

また、生徒による評価のためには、生徒に見取りの視点を確実に伝えていくことが必要である。この題材における、目標達成に向かうための見取りの視点は表10のようになる。このような視点をきちんと生徒に伝えていくことにより、生徒が自らの学習状況によりよく気付くことができる。

表10 「生徒による評価」のために、生徒に伝える技能面の見取りの視点

<p>○「こきりこ節」が箏で弾けているかどうか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 爪の付け方、手の形、箏への構え方が正しい。 2 「こきりこ節」のメロディーを、歌うのと同じようにつかえずに弾ける。 3 「休拍」の間に、次に弾く音の弦のところに、爪があたっている。 4 弾いた後に、爪が隣の弦で止まっている。 <p>○表現したいイメージを実現するための技能を身に付けているかどうか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 明確に友達に伝えることのできる、自分なりの表現の工夫がある。 2 表現の工夫を加えた上で、すらすらと弾くことができる。 3 奏法については、正しい奏法を踏まえている。(表現の工夫のために、奏法にこだわらない場合も出てくる。)

ところで、第2次実践終了後に、「生徒による評価」の信頼性を確認するために、工夫した表現の交流を拡大し、全生徒の発表を行う機会を設けた。その場では、評価規準に照らした教師による評価を行ってみた。これは、従来通りの実技テストにあたる。そして、「本実践での見取り」と「発表形式による教師からの見取り

(テスト)」でのずれの程度を比較してみた。

① 本実践での見取り		A	B	C	(数字は人数)
	ウの①	32	3	0	
② 発表形式による教師からの見取り		A	B	C	
	ウの①	29	6	0	
	ウの②	22	13	0	

結果は、上記の通りである。人数的には、ほとんど違いが見られなかった。しかし、教師からの見取りの結果、ウの①・ウの②のうち、1項目でも評価が下がった生徒は7人、評価が上がった生徒は8人いた。35名の学級で2項目なので、のべ人数が70人であることから、本実践での見取りと教師からの見取りとのずれ出現率は1項目あたり21%である。ずれの理由としては、以下のようなことが考えられる。

- ・「発表」という特異な環境の中で、緊張のあまり自分の力を発揮できない生徒がいた。
- ・自分にきびしい生徒が、自己評価を幸くつけた。

21%のずれがあると、「表現の技能」に関して、従来通りの「発表によるテスト」を併用する必要性はあるかもしれないが、「発表によるテスト」には、次のような弊害もある。

- ・人前で発表することは、ともすると音楽嫌いを作ってしまう原因になる場合がある。
- ・個々に発表すると、1単位時間以上かかってしまって、授業時数が削減された状況を考えると、そう合理的な方法ともいえない。
- ・中学校で、1回限りの発表(テスト)で、技能面を評価するのはどうか。

音楽科は決して技能の習得だけを目指している教科ではないので、その題材を通じて、長い目で生徒を見ていき、生徒に寄り添った評価をしていくべきだと考える。すなわち、

- ・生徒が自分の学習状況をより正確に見取れるようにし、生徒の評価を尊重していくこと。
- ・自分をきびしく評価する生徒には、教師の評価を伝える機会をできるだけ多くつくり、自己肯定感を高めたり、より客観的に評価したりできるよう支援すること。
- ・生徒の学習への取組の様子をよりよく観察し、生徒のよさを引き出し、題材の中で一度でもできていたらそれを認めていくこと。

が重要である。

(5) 教師の行う評価活動

では、教師の行う評価活動はどのようなものだろうか。資料1は、「こきりこ節」の歌を歌えるようにしている場面である。

**資料1: 全体の学習活動の取組の様子を認め、
授業の流れの調整を行うための評価活動**

T「この曲を今日は箏で弾けるようにするから、この音の感じを覚えましょう。もう1回、歌ってみよう。1、2、3、ハイ」
S（歌う。一カ所、ことばの入れ方が違っている。）
T「ここがちょっと、むずかしかったかな。なーがーいーはー。さんはい。」
（歌う。今度は、直っている。）
T「そうそう、今度はいいね。」

教師は、全体の取組の様子を見ながら授業を行っている。生徒の歌声を聴きながら、ことばの入れ方が違っているのを見つけ、下線部のようなことばがけを行い、フィードバックしている。これは、V1(2)で述べた、授業の流れの調整のための評価活動である。

資料2は、表現の交流の場面である。この場面の前の学習活動（技能習得のために個々に練習をする活動）での巡視により、Aと判断された生徒の表現を、クラス全員に紹介しているのである。

**資料2：個への評価でAと判断された生徒の表現を
全員に紹介する場面**

T「次、〇〇さん、弾いてみて。〇〇さんのイメージはどういうの？」
S「穀物がたくさん取れたことを喜んで、火の周りで輪になり、歌い踊っている。」
T「だそうです。楽しそうですね。どんな工夫があるかしらね。」
S（箏で弾く。途中、流し爪が入る。）
T「タラランっていうのが入ったね。はい、ありがとう。」

すべての学習活動に対して、教師の認めとしての評価活動が存在している。評価対象から考えると、全体に対するものと個に対するものの二種類がある。すなわち、資料1のような全体

を見て授業の流れを調整するためのものと、資料2のような個々の生徒の学習活動の取組の様子を見極めていくためのものである。個々の生徒の学習状況の評価することによって、規準に到達するのがむずかしいと思われる生徒に対する適切な支援を行うことや、活動内容が質的に優れていてAと判断できる生徒を見取ることができる。また、授業の流れから考えても、教師の評価活動にはさまざまな意味合いがある。それらを分類すると、表11のようになる。

このように、
・教師が学習中に生徒の様子を見取り、支援したり、授業の流れを調整したりすることは、すべて評価活動である。このことが「学習中における指導と評価の一体化」である。
といえる。

**3 生徒の「自らの学習状況への気付き」の様子は
どうだったか、そこからいえることは何か**

第1時の目標は、「『こきりこ節』のメロディーを覚え、箏で表現できるようにする」であった。終了時の生徒の気付きは次頁資料3のようである。

第2時の目標は、「表現したいイメージを実現するための工夫をする」であった。終了時の生徒の気付きは次頁資料4のようである。

第3時の目標は「自分で工夫した表現を取り入れて『こきりこ節』を演奏する」であった。終了時の生徒の気付きは、次頁資料5のようである。

第1時から第3時まで、すべての時間の生徒の「自らの学習状況への気付き」は、教師の提

表11 学習活動の流れに沿った教師の評価活動

学習活動の流れ		評価活動の種類	評価活動の意味合い
題材の導入の場面		動機付け評価	これから先の学習活動にスムーズに取り組めるよう、動機付けをするため。
活動 題を 材通 のし 目 標 螺旋 に旋 せ 的 ま に る	一つの学習活動の間	学習状況 確認評価	目標に向かって自分からすすんで学習活動に取り組んでいるかのチェック、目標達成がむずかしいと思われる場合の支援、素晴らしい取組をしている生徒の認めのため。また、授業の流れの調整のため。
	自己評価や相互評価を行うタイミングを見極める場面	チェック時期 見極め評価	自己評価や相互評価を行うタイミングを図るために、全体の活動の様子を観察し、ほとんどの生徒ができるようになってきた頃を判断する。その結果、まだ、評価の時期には早い場合は、フィードバックして学習活動を行う。
	一つの学習活動の終わりの場面	達成度把握評価	目標への達成度がどうであるかをつかむため。そこからつかみとった様子は、次の学習活動の組立ての調整や指導方法の改善に生かしていく。
題材の終末の場面		獲得度確認評価	この題材の学習によって、生徒に何が身に付いたのかを確認するため。

資料3 第1時終了時の生徒の気付き

- 気付きが**技能の習得**に向かっている例(31名)
 - ・こきりこ節のメロディーやリズムがわかった。
 - ・最初の△段まで、箏で弾けるようになった。
 - ・最後まで何とか弾けた。
 - ・音程をはずさないように歌えた。
 - ・今までに習った技法を思い出した。
- 気付きが**技能の習得以外**に向かっている例(2名)
 - ・爪を割らないように気を付けた。
 - ・箏をこわさないように気を付けた。

資料4 第2時終了時の生徒の気付き

- 気付きが**技能の習得**に向かっている例(9人)
 - ・最後まで弾けるようになった。
 - ・ゆっくり弾けば、たどたどしいけど最後までできそう。
- 気付きが**表現の工夫**に向かっている例(22人)
 - ・やり方を変えるだけで、何パターンもの音が出ることに気付いた。
 - ・いろいろな技法を試してみた。
 - ・箏にいろいろな弾き方があることに気付き、それを少し身に付けることができた。
 - ・自分のイメージに合う奏法が見つかった。
- 気付きが**はっきりしない**例(3人)
 - ・いろいろなことに気付けた。

資料5 第3時終了時の生徒の気付き

- 気付きが**技能の習得**に向かっている例(5人)
 - ・最後まで弾けるようになった。
 - ・だいたいよく演奏できた。
- 気付きが**表現の工夫**に向かっている例(29人)
 - ・工夫をするだけでこんなに曲が変わるとは思わなかった。
 - ・一本調子ではない、波のある演奏ができた。
 - ・自分のイメージ通りに弾けた。
 - ・自分らしさを出せた。
- その他の気付き**(1人)
 - ・改めて箏の楽しさに気付いた。

示した「目標」に沿っている。これは、生徒自身が、教師の提示した目標を「方向目標」ととらえ、それをもとに各自が目標を立て、自ら目標達成に向かっていることを示している。また、題材終了時の生徒の気付きには資料6のようなものがあった。

資料6 本題材終了時の生徒の気付き

- ・最終的に目標を達成できたような感じがする。工夫も表現もでき、とても楽しかった。
- ・大変だったけど、目標に向かってでき、最終的に目標が達成できたのでよかった。
- ・自分なりのイメージを見つけられたと思いました。
- ・自分なりの工夫はほどこしたが、発表した人よりまだまだだと思った。
- ・自分なりに工夫できたのでよかった。特に強弱をつけるところはうまくいったのでよかったです。
- ・この学習をして、もっと箏を弾きたいと思いました。だから、また、この学習を受けたいです。
- ・工夫した曲が最後まで弾けたのですごうれしかった。
- ・あまり工夫はできなかったけど、曲が弾けるようになってうれしい。もう少し時間が欲しい。
- ・最終目標にはあまり手が届かなかったけど、箏を楽しむということが味わえたので、自分的には満足しています。

本題材終了時の気付きを見ると、全員が自分の学習状況を肯定的にとらえることができている

ることがわかる。お互いの学習状況の質的な差は認めつつ、自分は自分の目標に向かってこれだけががんばれた、これが身に付いたという自負が表れている。以上のことから、

- ・目標に照らし合わせながら、自らの学習状況を把握し、自分なりの新たな目標を設定しながら努力していくことによって、生徒は「自分なりにがんばれた」という自覚や自己肯定感をもつことができる。

ことが明らかになった。

4 教師は生徒の気付きを、次の学習活動の組立ての調整や指導方法の改善にどのように生かしたのか

第2次実践第1時の目標は、前述のように「『こきりこ節』のメロディーを覚え、箏で表現できるようにする」であった。もちろん、この時間だけで全員の生徒が最後まで弾けるようになるのはむずかしい。しかし、第1次実践を通して「技能の習得は個人差のあることなので、十分に時間をかけてその生徒なりの学習速度で習得していけばよい」という考えが得られていたので、第2次実践ではその考えを生かして授業を行っていくことにしていた。

生徒は第1時終了時に、「目標達成のためにこの後やりたい学習」として、資料7のようなことをあげた。

資料7 この後やりたい学習(第1時)

- ・もっと弾く練習をしたい。
 - ・たくさん練習したい。
 - ・曲がすらすら弾けるようにしたい。
- ※全員の生徒が、「もっと練習したい」「もっと箏に触れたい」と記述した。

これらの生徒の気付きを受けて、第2時の学習活動を次のように修正した。

- 「こきりこ節」の民謡のCDを聴いて感じ取ったイメージを、絵や文で表す活動を考えていたが、生徒が「もっと弾く時間が欲しい」「弾けるようになりたい」と考えていることから、この活動を簡略化し、箏に触れる時間を十分確保できるようにした。
- グループを組んで学習する形態を予定していたが、一人に一面の箏が使える環境と生徒の弾きたいという願いを考慮して自分のペースに応じた個別学習で、学習を進めていけるようにした。

第2時の目標は前述のように、「表現したいイメージを実現するための工夫をする」であった。学習指導案上は、学習時間の終わりに、「各自のイメージの実現状況を相互評価する」活動

を設けていたが、巡視をしてみたところ、自分のイメージを表す音が見つかっていなかった生徒が多かったため、試行表現活動を継続し、相互評価は次の時間に行うことにした。

生徒は、第2時終了時に、「目標達成のためにこの後やりたい学習」として、資料8のようなことをあげた。

資料8 この後やりたい学習(第2時)

- ・もっと考えて、工夫してやっていきたい。
- ・今日はイメージしたい表現の工夫が一つ思いついたので、どんどん工夫してみようと思う。
- ・もっとたくさん弾いてたくさん工夫を見つけない。
- ・自分の表現したいことをまとめて、うまく箏であらわせるようになりたい。
- ・イメージした表現ができるように、繰り返し練習したい。

これらの生徒の気付きを受けて、第3時の学習活動を次のように修正した。

- 個別に自分の表現を追求したいと考える生徒が多いことから、引き続き学習をしていくことによって、質的に深めていくことにした。そのため、進度の早い生徒に発展的な学習として考えていた「小アンサンブル活動」を取りやめた。

第3時の目標は、前述のように「自分で工夫した表現を取り入れて、『こきりこ節』を演奏する」であった。修正された学習活動の結果、生徒が感じ取った気付きは前項3に示した通りであり、すべての生徒が自分なりに目標に迫っていった充実感を語っている。以上のことから

- ・「最終的に目指す姿」を変えずに、生徒の気付きに合わせて、学習活動の組立てを調整していくことが大切である。そのことが指導と評価の一体化である。

ということが明らかになった。

5 教師は、どのような配慮点をもって授業に臨み、目標の達成が図れていない生徒を見取り、それぞれに応じた支援を行ったのか

本研究の授業実践において、目標への到達がむずかしいと思われ、支援をした例をまとめたものが表12である。原因を整理してみると、三つの観点に分けられる。ここから、

- ・「関心・意欲・態度」は、すべての学習活動の原動力となることから、この観点に関しては個に応じた十分な配慮が必要である。
- ・これができない、あれができないという目で生徒を見るのではなく、肯定的な視点で生徒を見て、個に応じた支援を行う。

ことが、重要であることがわかる。

6 学習カード等の補助プリントを、どのように作成し、活用したのか

本研究では、三種類の学習カードを作成し、活用した。各自の学習カードは、ファイルに綴じ込んで、ポートフォリオとした。これまでに述べてきた通り、生徒は、学習カードを活用しながら、自分の力で目標に向かっていくことができた。(資料編6参照) このことから、

- ・学習の目標に合った適切な学習カードを作成・活用し、ポートフォリオとして整理していくことにより、生徒が自らの学習状況に気付き、自らの力で目標達成に向かうために役立つ。

ことが明らかになった。

VI 研究のまとめ(提言)と今後の課題

本研究によって明らかになったことを踏まえ、「イメージをもって音楽表現する学習」における「自らの学習状況に気付ける評価活動の在り方」を表13及び表14のように提言する。

また、今後の課題は、以下のようである。

- 本研究で得られた考え方を基に、評価規準を盛り込んだ年間指導計画や、各題材の指導計画、学習カード等を作成する必要がある。
- 授業時間内で効果的に使用できるような学

表12 支援した例(学習の様子)と個に応じるための配慮点

観点	学習の様子	原因	個に応じるための配慮点
1 関心 ・ 意欲 ・ 態度	・学習への取組に見るからに意欲がない。 ・学習活動に取り組もうとしない。	・学習に取り組む意欲がない。 ・学習に目を向けられないほどの阻害要因が存在する。	・音楽の学習だけに意欲がないのか、他教科の学習にも意欲がないのかを、担任教師等との連絡を密に取りながら見極める。 ・学習に対して少しでも意欲的に取り組めるように、たゆまぬ声かけを心がける。 ・隣に行って、一緒に音楽活動を行い、少しでも進歩が見られた場合は、惜しまずに賞賛する。 ・すぐにできて、興味をひきそうな音楽活動を取り入れる。
2 感受 や 工夫	・音楽を聴いて感受した内容を学習カードに書けない。 ・試行表現をどのようにやったらいいか戸惑っている。	・音楽を感受する能力が低い。 ・やり方がわからない	・音楽を感受する能力におけるレディネスが達成されていないので、音楽の諸要素を、わかりやすいことばで言い換えるなどしながら、感受を促す。 ・そばに行き、さまざまな奏法を例示し、どれかを使って表現の工夫をしてみるよう、促す。
3 表現 の 技能	・他の生徒よりも、技能の習得が遅い。 ・練習時に、何をしたらよいかかわからず、戸惑っている。	・技能の習得の速度が遅い。 ・基礎的な技能が身に付いていない。	・単に奏法を知らないだけなら、側に行き奏法を教える。能力的に無理があるような場合は、全体に与えた課題をスモールステップ化し、その生徒にやれそうなところまでを課題として与えていく。

習カードの活用方法について、さらに研究する必要がある。

- 生徒が自らの学習状況によりの確に気付けるような、自己評価能力の向上にかかわる研究を行う必要がある

<主な参考文献>

- ・教育課程審議会答申『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について』(2000)
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成・評価方法の工夫改善のための参考資料－評価規準、評価方法等の研究開発(報告)』(2002)
- ・金本 正武 著

『子供と音楽のかかわりを深める音楽科授業論』 東洋館出版社(1997)

『小学校音楽科 基礎・基本と学習指導の実際』 東洋館出版社(2002)

- ・川池 聰 著『これからの音楽科の評価の在り方』『学習指導案作成の作業』音楽鑑賞教育振興会 講習会資料(2002)
- ・荻野 佳子・内田 秀紀・山崎 幹夫 著『授業研究のあり方に関する一考察』群馬県総合教育センター 研究紀要第9号(2002)
- ・平山 満義 編著『質的研究法による授業研究』北大路書房(1997)

表13 「イメージをもって音楽表現する学習」における「自らの学習状況に気付ける評価活動の在り方」

大項目	小項目	提 言
評価規準	評価規準の作成	<ul style="list-style-type: none"> ・題材の目標はできる限り明確にし、『こきりこ節』を箏で、多少の間違いはあっても、最後まで弾くことができる。』のような具体的な生徒の姿が見える評価規準を、総括的評価規準(それぞれの学習活動の目標としての評価規準)として作成する。 ・生徒が、自分の力で目標を達成できるように、学習活動におけるスモールステップとしての評価規準(形成的評価規準)は、『爪の付け方や構え方、弾き方がわかる。』のような生徒から見た書き方で示しておく。
目標	目標の明確化・共有化	<ul style="list-style-type: none"> ・題材の目標(最終目標)及び、それぞれの学習活動における目標は、『こきりこ節』のメロディーを覚え、箏で表現できるようにする』のようなわかりやすいことばで明確に生徒に伝え、生徒と目標を共有した上で授業を行う。 ・題材の目標や、それぞれの学習活動の目標を生徒と共有することにより、生徒が目標に照らした自分の学習状況に気付け、自らの力で目標達成を図ることを可能にしていく。
観点別の見取り	「関心・意欲・態度」の見取り	<ul style="list-style-type: none"> ・「関心・意欲・態度」は、あまり細かく評価規準を設定せず、「友達と協力しながら表現活動に意欲的に取り組んでいる」のような評価規準を設定し、題材全体を見通しながら、長い目で生徒の様子を見取っていけるようにする。
	「表現の技能」の見取り	<ul style="list-style-type: none"> ・「表現の技能」の評価は、十分な練習時間を取った後に、どの程度できるようになったかという観点で、質的に評価する。 ・技能習得の個人差を見極め、その生徒なりのペースで習得できるよう支援する。 ・「技能習得チェックカード」の内容を工夫し、生徒が自分の技能習得の状況をより正確に見取れたり、生徒の自己評価・相互評価が適切に行えたりできるようにし、生徒による評価を尊重していく。 ・「このくらいではまだ弾けたことにならない」などと、自分をきびしく評価する生徒に対しては、教師による評価を伝える機会を多くつくり、より客観的に評価したり、自己肯定感を高めたりできるよう、支援する。 ・生徒の学習への取組の様子をよりよく観察し、生徒のよさを引き出せるようにし、たとえ、緊張のあまり相互評価の場面でうまく弾けなくても、題材の中で一度でも弾けていたらそちらを認めていくようにする。
学習中における評価活動	教師による評価(指導と評価の一体化)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中に生徒の様子を見極め、そばに行き一緒に活動することにより支援したり、まだうまくできていないところに戻って授業の流れを調整したりことは、すべて教師による評価である。それが、授業中における指導と評価の一体化である。 ・題材の最終目標を達成するために、生徒の気付きを生かしながら、次の学習活動の組立ての調整や指導方法の改善を行うことも指導と評価の一体化である。
	生徒による評価	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は生徒の学習状況をうまくつかんで、ほぼ全員ができるようになってきたことを確認し、評価活動を行うタイミングを図る。 ・「自己評価をするための表現活動」で、自分にできる精一杯の表現を目指させる。 ・生徒に相互評価の価値を認識させ、友達の表現をきちんと見取るようにさせる。 ・「弾いた後に、爪が隣の弦で止まっているか」などの、生徒にも評価可能な見取りの視点を、教師がきちんと伝える。
教師の支援	個に応じた支援	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は、「奏法は大丈夫だろうか」「楽譜の見方のわからない生徒はいないだろうか」のような、目標に即した見取りの視点をもって生徒の学習活動の取組の様子を見取り、個に応じた適切な支援をしていく。その際には、必ずできるようになることを信じて、肯定的な視点で生徒を見ることが大切である。 ・「関心・意欲・態度」に起因する支援については、特に配慮が必要である。担任教師等との連携が必要な場合もあるが、そばに行き一緒に音楽活動を行い、少しでも進歩が見られたら賞賛するなど、たゆまぬ声かけを心がける。
学習カード	学習カードの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習状況チェックカード」「技能習得チェックカード」「学習状況ふりかえりカード」のような、学習の目標に合った適切な学習カードを作成・活用し、ポートフォリオとして整理していくことで、生徒が自らの学習状況に気付き、自らの力で目標達成に向かうのに役立てることができる。

